

〈資料紹介〉和刻本『金鰲新話』の諸本（続）

邊 恩 田

はじめに

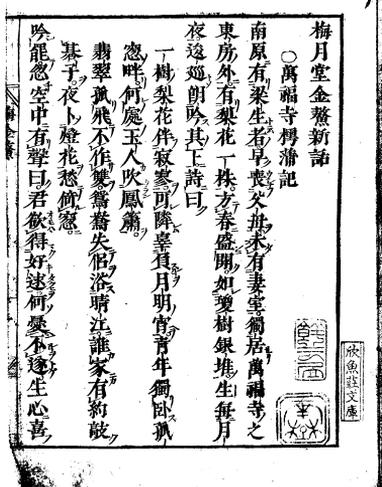
筆者は、先の「和刻本『金鰲新話』の諸本」（本誌六五号^①）において、江戸期に和刻本として板行された朝鮮王朝時代初期の漢文小説『金鰲新話』の諸本について報告を行った。承応二年（一六五三）、万治三年（一六六〇）、寛文十三年（一六七〇）の三種の刊記をもつ、八伝本について報告をしていた。

その後、山形県酒田市の光丘文庫に、万治三年刊記の一本が蔵されることを発見し、その調査を行うことができた。また、早稲田大学図書館には、すでに報告済みの万治三年刊記本のほかに、より古い承応二年刊記の一本が所蔵されていることを知り、調査の機会が得られた。そしてさらに、随心院に蔵される承応二年刊記本の調査も行うことができた。

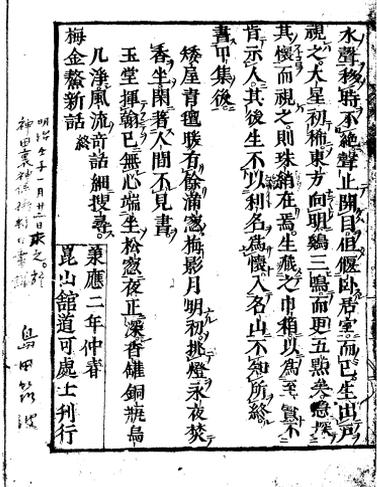
これらの今回初めて紹介する三伝本を加え、江戸期の和刻本『金鰲新話』は、十一本の伝存が確認できた。これら三本は、和刻本『金鰲新話』の研究進展に大いに寄与するものと思われる。以下において、三伝本についての書誌と伝本に関して知り得たところを報告したい。

一 早稲田大学図書館蔵本

和刻本『金鰲新話』は、承応二（一六五三）年刊記の本が、現伝する最古の伝本である。これまで実に永い間、承応二年刊記本は、国立公文書館（内閣文庫）蔵本が唯一のものとして存在が知られてきたのであるが、早稲田大学図書館蔵本と、次項に見る随心院蔵本の二本が新たに確認できたことで、一挙に三本が増えることとなった。



一丁表 早稲田大学図書館蔵



四十五丁裏

図 1

- 整版（木版） 大本 一冊
 - 外題 （なし）
 - 内題 「梅月堂金鰲新話」
 - 大きさ 縦二七・九×横一八・五cm
 - 表紙色 緑色
 - 綴じ方 五つ目綴じ
 - 版式 四周单边有界 十行×二十字
 - 丁数 四十五丁 内郭 二〇・四×二五・一cm
 - 版心 上下白口白魚尾（一〜八、十三〜二十、二十九〜四十五丁）、黒魚尾（九〜十二、二十一〜二十八丁）
 - 柱刻 「梅金鰲 （丁数）」
 - 刊記 「承應二年仲春／崑山館道可處士刊行」
- (1) 早稲田大学図書館には、すでに報告したように、万治三年刊記の和刻本『金鰲新話』が一本蔵されている。ところが、この伝本以外にもう一本、承應二年刊記本が所蔵されていた。ここに初めて報告するものである。これまで承應二年刊記本は、国立公文書館内閣文庫蔵本の一本しかなかったため、この本は和刻本『金鰲新話』研究の貴重な資料となる。なお平成三年十二月早稲田大学図書館刊の『早稲田大学図書館所蔵漢籍分類目録』には、承應二年刊記本の記載がないが、これはおそらくその時点で未整理であ

ったか、所蔵所が異なっていたためかと思われる。

- (2) 前表紙の右下に、「風陵文庫／文庫19／F189」の書票が貼られている。前表紙に題簽は無く、手書きの書名なども記されていない。表紙の色はかなり退色し剝がれ落ちていることを見れば、もともと題簽が貼ってあったが剝がれ落ちたと考えることもできよう。伝本全体に虫食いは少なく、本の保存状態は良好で、資料的価値は高いといえよう。

- (3) 一丁表の右下匡郭内に、蔵書印記「南楚」「養云居」があり、右下匡郭外には「欣魚莊文庫」の朱印記が見られる。(図1参照) また、四十五丁裏左匡郭の外に、明治壬子一月廿二日に神田裏神保街村口書舗で求めたという本購入者による自書が見られる。(図1) のち早稲田大学の沢田瑞穂氏が購入、その後図書館所蔵となったようである。

- (4) この伝本には、ほぼ全編にわたり、朱引きがされている。単語の種類に従って、本文の単語の右側、中央、左側の位置に、朱筆の線が引かれている。このような漢文読解の跡が随所に残されている。『金鰲新話』享受の様相がうかがえるのは興味深い。

二 隨心院蔵本

整版(木版) 大本 一冊

〔資料紹介〕和刻本『金鰲新話』の諸本(続)

外題 題簽「道春 金鰲新話」

内題 「梅月堂金鰲新話」

大きさ 縦二七・七×横一八・一cm

表紙 縹色

綴じ方 五つ目綴じ

版式 四周单边有界 十行×二十字

丁数 四十五丁 内郭二〇・四×一五・一五cm

版心 上下白口白魚尾(一〜八、十三〜二十、二十九〜四十

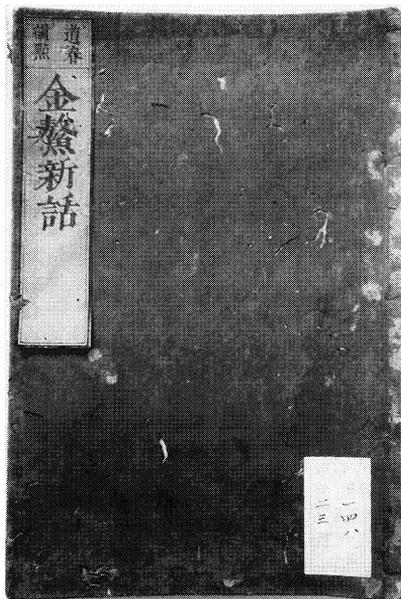
五丁)、黒魚尾(九〜十二、二十一〜二十八丁)

柱刻 「梅金鰲 (丁数)」

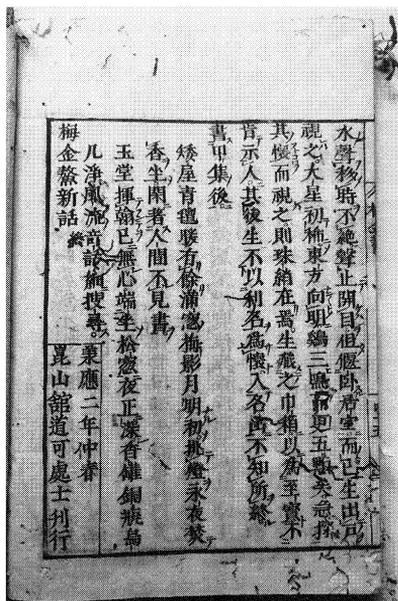
刊記 「承應二年仲春／崑山館道可處士刊行」

- (1) 隨心院は、京都市山科区小野に所在する真言宗善通寺派の大本山であり、門跡である。小野小町由緒の遺跡や、庭園でも広く知られる。「当山は、真言宗善通寺派の大本山にして、弘法大師御入定後、百二十一年、弘法大師より八代目の弟子にあたる、仁海僧正の開基にして、一条天皇の正暦二年(西暦九九一年)奏請して、この地を賜り一寺を建立されました。」(隨心院発行パンフレット)と解説される。慶長四年に本堂が再建され、今日に至るとい

う。
隨心院本についての紹介^②があつたが、その報告にいう隨心寺は



表紙 隨心院蔵



裏四五十四

図 2

誤りで、隨心院が正しい。

(2) 前表紙右下に、「隨心院聖教／第一四八函／第三號」と記載した図書分類の書票が貼られている。(図2参照)しかし、隨心院には、所蔵する文献類についての目録はあるが、内部用のもので、公開はされていないことである。

(3) 前表紙左上に、「調點 金鰲新話」と刷る双辺の題簽が貼られている。(図2参照)「調點」という角書は林羅山による調点を意味するもので、となると承応二年刊記の伝本の段階で、羅山調点を

いう角書があったことになるか。ただ、題簽に剝がれや退色がありなく比較的良好に残っていることと、現表紙が後補の表紙であることから察するに、承応二年時ではなく、改装時の題簽である可能性があることになり、断言はできない。

(4) 刷りの状態を見たところ、墨は国立公文書館蔵本に近い程度の鮮明さを保持している。しかし惜しいことに、これまで筆者が接した伝本のなかで最も虫食い欠損が多い伝本である。けれども、最も古い刊記をもつ本として資料価値は高いといえよう。

(5) 一丁表や末丁などその他いずれにも、隨心院の印記や蔵書印などは見られない。隨心院顧問(文化財)の藤本孝一氏^①によれば、この本がいつ所蔵されたのか、その経緯などについてはよくわからないとされる。今後の調査をまらしたい。

また、蔵書印記がないだけでなく、書き入れ・付線・朱引きなどといった、後人による本への関与を表すものも全く見られなかった。

(6) この伝本の特徴として表紙がある。現在は、綴じ糸が完全に切れて、前後の表紙ともにはばらばらな状態になっている。表紙は原表紙ではない。しかしその料紙は、他伝本には見られなかった、文様入りの上質のものを用いていて目を引く。藤本氏はこれを「空摺りの雷紋つなぎ唐草文様」の料紙だとされ、これに従う。

三 光丘文庫蔵本

整版(木版) 大本 一冊

外題 題簽「道春 金鰲新話 全」
調點

内題 「梅月堂金鰲新話」

大きさ 縦二六・五×横二七・五cm

表紙 縹色

綴じ方 五つ目綴じ

版式 四周单边有界 十行×二十字

丁数 四十五丁 内郭 二〇・二五×一五・一五cm

版心 上下白口白魚尾(一〇八、十三、二十、二十九、四十

五丁)、黒魚尾(九、十二、二十一、二十八丁)

〔資料紹介〕和刻本『金鰲新話』の諸本(続)

柱刻 「梅金鰲 (丁数)」

刊記 「萬治三曆仲夏吉且／飯田忠兵衛新刊」

(1) 山形県酒田市日吉町所在の酒田市立光丘文庫に、和刻本『金鰲新話』一本が所蔵されている。光丘文庫発刊の『光丘文庫所蔵漢籍分類目録』に、「梅月堂金鰲新話 一 万治三 七三九」と記載される。

前表紙に貼られた図書票には、枠の三方に「羽洲／庄内／本間家」の字が刷られ、中に「全一冊／京二ノ二番／一號」と記される。(図3参照)また、一丁表下に「311／79／1」の図書番号票が貼られる。

(2) 光丘文庫というのは、山形県庄内地方(現在は酒田市)の本間家が旧蔵する書籍を主体とする文庫である。その沿革について、光丘文庫刊の案内書(「光丘文庫の沿革」)等⁵⁾によって次に略記すれば、宝暦八年(一七五八)、本間家三代の当主光丘(四郎三郎光丘・享保一七一享和一)氏は、同家中興の祖として実業に功績が大きく、また文事に関心が高く、僧俗一般庶民の修学のため無料宿泊所と図書館を兼ねた寺院の建立を再三江戸幕府に願い出たが、新寺停止の政策により許されなかったという。大正十二年、本間家八代目の光弥当主は、光丘の遺志を継ぎ、祖先伝来の蔵書約二万冊と建設費及び維持基金十万円を寄贈して、財団法人「光



図3 表紙 光丘文庫蔵

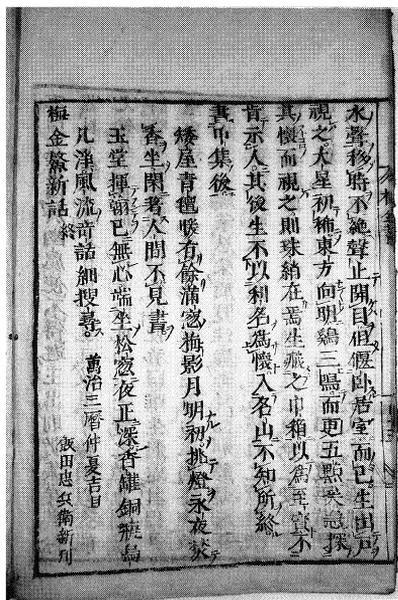


図4 四十五丁裏



図5 後表紙見返し

「光丘文庫」を設立した。昭和二五年に酒田市立図書館が設立され、昭和三三年四月に光丘文庫は蔵書約六万冊並びに建物等一切を酒田市に寄付して、酒田市立図書館の名称を「酒田市立光丘文庫図書館」と改称した。昭和五七年には、中央図書館設置を受け、名称を再び「酒田市立光丘文庫」と改称し、現在に至っているという。

光丘文庫は、本間家が歴代にわたり収集した和書・漢籍などの古典籍をはじめ、県・市指定の文化財、古文書郷土資料、寄贈書等、七万六千七〇〇余冊（点）を所蔵している。和書約二万四千冊のうち、特に俳書は、光丘自身が俳号をもち庄内俳諧盛行の歴

史もあって著名であり、国文学研究資料館による共同研究報告

『酒田市立光丘文庫俳書解題』が備わっている。また漢籍約六千八百冊についても、漢学の基本図書がよく揃い、質が高いと評されている。これは、光丘が一九歳より播州姫路の奈良屋で修業した折、漢籍の講釈、聖賢の教えを受けたことや、本間家が庄内地方を本拠地に日本海を京都まで行き来する北前船で活躍したこと^⑤などが、その背景にあるかと思われる。

- (3) 光丘文庫蔵本は、万治三年刊記の本で、そのなかでも板元「飯田忠兵衛新刊」を刊記に刷る伝本であり、貴重である。(図4参照) 京都大学文学研究科図書館蔵本と京都大学附属図書館蔵本と同じく、「飯田忠兵衛」が新刊した『金鰲新話』であった。本文に確認したところ、やはり両伝本同様、二十二丁裏9行には「風」ではなく「風」字であることを確認できた。その資料が一本増えたわけである。

- (4) 前表紙には、双辺の刷り題簽「遺春 金鰲新話 全」が貼られている。(図3参照) この点も、随心院蔵本と同様、訓点者林羅山問題を考える上で重要な資料となる。

ただ、「全」の字については、写真では見えないが、原本にはわずかに痕跡が認められ、「全」と判読できるものである。

虫食い欠損がままあり紙の傷みも見受けられるが、保存は良好

〈資料紹介〉和刻本『金鰲新話』の諸本(続)

な方である。

- (5) 一丁表には、寄贈印の他に、蔵書印三点が捺されている。「光丘文庫」という大小の朱方印、そして鳥甲印(印文は「本間氏図書」朱墨混捺印)の三点。鳥甲印は、船形にも見える絵模様のように美しく珍しい図柄の蔵書印である。

また、後表紙の見返しには、香炉印(印文は「本間本間両室洞」朱印)が捺されているが、中国の童子とおぼしい三童子が大きい壺を担ぐ絵柄で、こちらも珍しい。(図5)

おわりに

以上で報告したように、和刻本『金鰲新話』の諸本は、これで現在合計十一本の伝存が確認された。このうち最も古い刊記は承応二年刊記で、一本あったのが三本に増えた。国立公文書館内閣文庫蔵本・早稲田大学図書館蔵本・随心院蔵本、となる。

そして、万治三年刊記の伝本は、「飯田忠兵衛」板元が出した伝本が二本から三本に増えた。京都大学文学研究科図書館蔵本・京都大学附属図書館蔵本・光丘文庫蔵本、となる。

これらの六伝本は、二十一丁から二十四丁までが覆刻される以前の刷りであることは重要である。特に一例だけ挙げるなら、二十二丁裏9行の「晴風欲雨」の「風」が、底本である朝鮮刊本『金鰲新

〈資料紹介〉和刻本『金鰲新話』の諸本（続）

話」（現中国大連図書館蔵。養安院旧蔵本）と同じく「嵐」の字であることなど、今後の和刻本『金鰲新話』の研究進展に寄与する貴重な資料となる。

注

- ① 拙稿「資料紹介」和刻本『金鰲新話』の諸本——江戸時代に出版された朝鮮時代の小説——、『同志社国文学』第六五号、二〇〇六・一一。
- ② 早川智美「金鰲新話——訳注と研究——」和泉書院、二〇〇九。
- ③ 道春訓点と林羅山については拙稿「朝鮮刊本『金鰲新話』と林羅山」〔朝鮮文学論叢〕白帝社、二〇〇二）や注①で言及している。
- ④ 隨心院蔵書調査時、藤本孝一氏（龍谷大学客員教授・前文化庁美術学芸課主任文化財調査官）には大変お世話になった。深謝申し上げる。
- ⑤ 森川昭「光丘文庫と庄内俳諧史」国文学研究資料館共同研究報告『酒田市立光丘文庫俳書解題』明治書院、一九八三。
- ⑥ 堀川豊永「救荒の父 本間光丘翁」（人文閣、昭一九）、岡本好古「本間光丘」（『歴史の群像7』集英社、昭59）などを参照。

〔付記〕 資料掲載を御許いただいた早稲田大学図書館・光丘文庫・隨心院に深謝申し上げる。